

対象：中学生以上、教職員研修

## 映画「郷」教育活用



文部科学省選定映画（科目：生き方・人生設計）

## 映画「郷」で育む資質・能力3つの「ごう」 探究学習GO！プログラム

郷

家族・地域・文化

ふるさと・つながりを感じる

業

学業・社会・未来

生き方を考える

GO!

挑戦・発信・実践

行動力を育む

「人々の幸福(Human Well-being)」の実現を目指して

Letheany&Co. (レシアニー)

〒899-5651 鹿児島県始良市脇元492

代表 小川夏果

ogawanatsukaofficial@gmail.com

+81 90 1132 7170



# 映画『郷』を教育に活用する意図

社会の急速な変化の中で、生きることに悩み、苦しみ、その出口が見つからず心に深い傷を抱えながら生きている人たちがいます。そんな中で、私たちに一体何ができるのか？と問いかけたとき、私たちはこれからの未来を担う子どもたちの心の教育に力を注ぎたいと強く感じ、映画『郷』を制作し、教育現場で活用してもらいたいと考えました。

監督が留学先で感じた**日本の子どもたちの幸福度の低さに対する危機感**<sup>(1)</sup>と、**海外に行ったことで再認識した日本の美しさを伝えたい**という強い思いから、

「命」をテーマに、四季を追い自然の移り行く様と万物の流転を描き、この瞬間の尊さを感じながら自己理解と他者理解を深める時間をあたえてくれる作品となっています。

映画コンテンツを教育に活用することは、子どもたちのモチベーションを高め、異文化理解や多様性の受容など、情緒的・社会的な学びを促進する効果があります。 自然の中で多く撮影した『郷』は、台詞を極力排し、視覚と音響による表現を重視することで、観る者の感性に直接訴えかけ、心で感じる体験を提供します。人生の選択を考え始める青少年にヒントを与え心の成長の手助けとなる学習教材としての活用や教職員を対象とした研修及び社会福祉施設における上映会などにおいても幅広く活用され、今後も多くの方に心の拠り所として、映画「郷」を観てもらえたら幸いです。



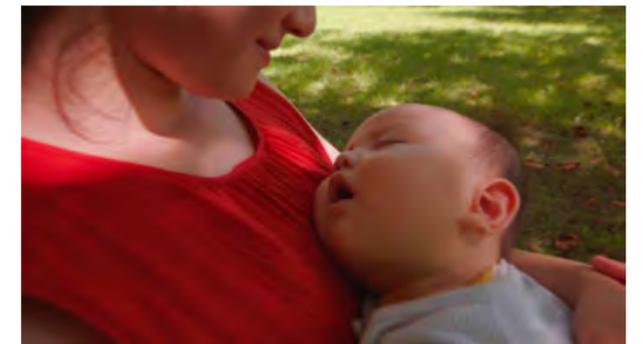
(1) ユニセフの報告書『レポートカード16』：日本の子どもたちは身体的健康においては高い評価を受けているが精神的幸福度においては先進38か国中37位と非常に低い順位に位置している。この結果は日本の子どもたちが物質的には恵まれているものの、心の満足感や幸福感が不足していることを示唆している。

# なぜ今の時代に“映像”を通した心の教育が必要なのか？

## 日本の子どもたちの幸福度は OECD加盟国 (38カ国) の中で最下位クラス 自己肯定感の低さ、いじめ、不登校、将来への不安など、多くの課題に直面

生徒が本当に「自分と向き合う時間」を確保することの重要性

「自分の考えを持ち、表現し、行動する力」を育む教育が今、求められている中で、映画『郷』は、自らの生き方について深く考え、社会との関わりの中で「どう生きるべきか」を探究します。



## 人間の脳は、テキストよりも映像を60,000倍速く処理する

映像の力は先生が説明できないときや子どもたちが伝えられないときの代弁者

「命の大切さ」や「いじめ問題」は実体験で教えることは難しく、言葉では説明しにくい生きる上での大切なことを映画で実体験のように感じ、伝えることが可能です。



## ふるさとへの誇りと帰郷の意識を育む

自分たちが育ったふるさとに誇りを持つことの重要性

将来、県外や海外で活躍することになっても、「またふるさとに帰りたい」「ここが自分の原点」と感じられるような体験が重要であり、映画『郷』は、日本の原風景を描くことで、「ふるさととは何か？」を問いかけ、「ここに生まれてよかった」と思えるような心を育むことができます。この映画を通じて、「自分が生まれ育った場所には、唯一無二の価値がある」ということを届けます。



# たった1分間の動画が 180万文字の情報量を持つ

※アメリカ調査会社によるもの

様々な活用が可能  
娯楽だけではない



## 【映画は国境を越えたコミュニケーションツール】

## 監督 伊地知拓郎

(重慶35mm批評家週間 最優秀賞、  
上海国際映画祭 作品賞監督賞ノミネート)

◆ 1998年生、鹿児島市出身・始良市在住

◆ 北京電影学院監督学科卒業 (歴代初日本人)

◇ 短編「星の音」ロンドンインディペンデント

国際映画祭学生部門最優秀賞

◇ 短編「WHATEVER YOU WANT IT TO BE」 Short Short film  
Festivalノミネート、指宿映画祭銅賞など

様々な映画祭で受賞

社会の様々なルールに則り生きている私たちが、映画の中では固定  
概念や先入観を捨て、頭を空っぽにして作品に浸ってもらいたいと  
いう思いから「没入感」にこだわって本作「郷」を作りました。



監督 後輩ヘエール  
鹿児島市出身の映画監督、伊地知拓郎さん(24)が10日、母校の開陽高校で講演した。写真。一目標に「準備をしておけば必ずチャンスをもてける」と、後輩ヘエールを送った。伊地知さんはプロ野球選手で、80人が聴衆。質疑応答で「郷」の制作について尋ねた。伊地知さんは「今まで逃げてきた人生だ、これ以上逃げられないという危機感を持ってやっ」と答えた。

上海は、世界の映画や音楽を教えてくれた父・陳躍さん(2003年度南日本文学賞受賞者)の出身地で、映画の専門大学「北京電影学院」に入学する前の半年間、叔母の家に身を寄せ中国語を猛勉強した。そんな思い出の地でレッドカーペットを踏む。「とつても感慨深い」としみじみ語る。

アジア新人部門で最優秀作品賞などにノミネートされた長編第1作「郷」には、プロを夢見て高校で野球部に入ったが挫折、退学し開陽高校に編入した自身の経験が反映されている。作中に退学した高校近くの球場



かお

も出てくる。「振り返るとあの苦勞もよかったのかな」。歳月を経て芸術へと昇華させた。日本を飛び出し世界を旅して気づいたのは、古里鹿児島的美しさだ。「郷」では1年かけて

撮影した県内各地の四季が見どころ。「地元の人に唯一無二だと知ってほしい。海外の人には新鮮味を持ってもらえれば」。

7月14日に薩摩川内市で無料上映会を開く。中国での上映が決まり、鹿児島と東京では早ければ秋にも劇場公開される。「プロデューサーの力」と盟友小川夏果さんへの感謝も忘れない。

好きな監督は「オッペンハイマー」のクリストファー・ノーラン。「郷」に出演した祖母のいる始良市に住み、鹿児島市の実家にもよく行く。実家に飾られたマハトマ・ガンジーの言葉「善きことはカタツムリの速度で動く」が座右の銘。「映画を通して世界の人々の心を豊かにする」夢をゆくりとかなえていく26歳。(豊島浩二)

上海国際映画祭にノミネートされた映画監督

伊地知 拓郎さん

# 映画「郷」 制作者 紹介

【移住は使命】 映画「郷」を製作するために  
鹿児島へ移住し、起業。

## プロデューサー 小川夏果

(Letheany&Co.代表、  
KORVVA Japan取締役)

- ◆ 同志社大学 法学部法律学科 卒業
- ◆ 三井住友銀行 堂島法人営業部
- ◆ 女優へ転身 オスカープロモーション所属
- ◆ 現在プロデューサーとして映画・映像制作を手がけ  
教育分野への映像活用を推進。
- ◇ 鹿児島県垂水市観光大使 就任(2015~2017)
- ◇ 中国唯一映画国立大学 北京電影学院留学(2019)
- ◇ 鹿児島で映画「郷」製作開始(2021~)
- ◇ 鹿児島県大島紬クイーン 就任(2022~2024)
- ◇ 鹿児島県へ移住(2023) Letheany&Co.設立



鹿児島市出身の映画監督、伊地知拓郎さん(26)の初の長編作品「郷」 僕らの道しるべ」でプロデューサーを務めた。「資金集め、スタッフの確保、キャストティング、ロケハン、撮影スケジュール管理、編集チェック：撮影の時は運転手もやって、何でも屋ですね」とほほ笑む。

2011年から19年まで俳優として多くの映画やドラマ、CMに出演。「映画や演技をもっと学びたい」と留学した中国の北京電影学院で、伊地知監督と出会い、映像を見てその才能に驚いた。「11」まで洗練され、計算された作品は見たことがな

### かお



「郷」の撮影を始めた。高校の野球部員が主人公。元球児の伊地知監督は丸刈りの球児の出演にこだわった。あちこ

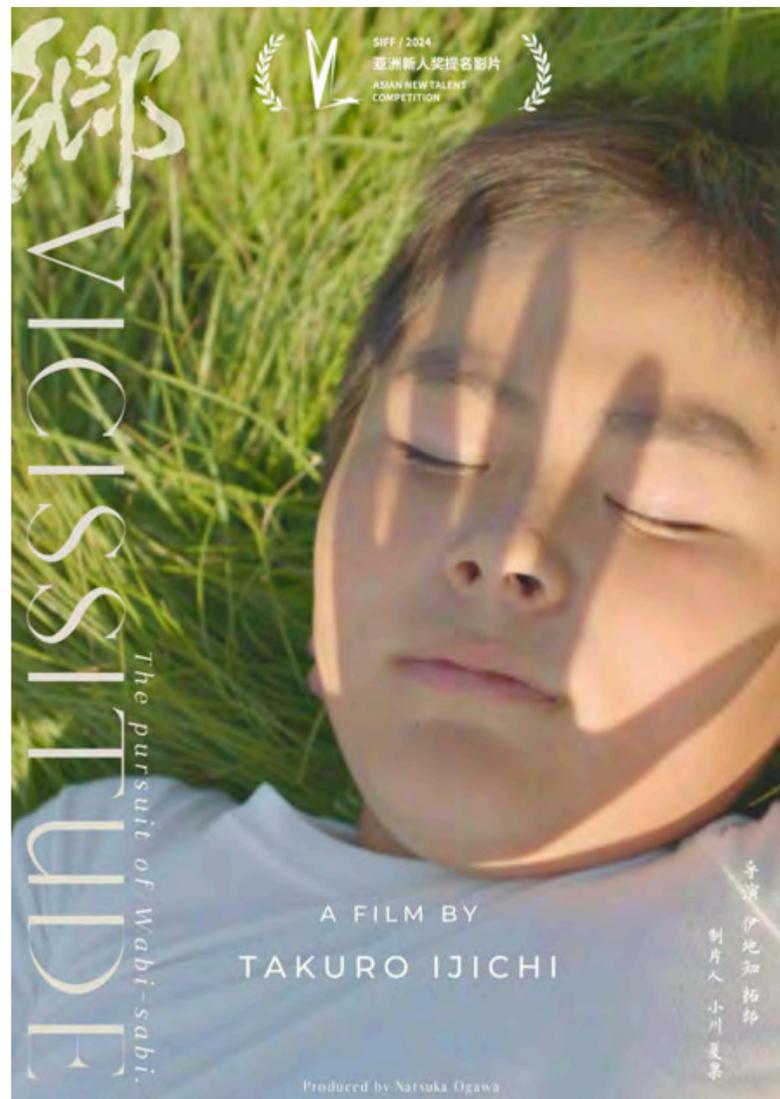
鹿児島から世界を目指す映画プロデューサー  
小川夏果さん

ちお願いして回ったが「高野連がOKしないと断られた」。それでも諦めなかった。母校・同志社大学の元学長で面識があった八田英一さんは、当時日本高野連会長。「本物の高校野球を描きたいんです」と直談判。県内球児の出演にこぎ着けた。

「郷」は撮影に1年、編集に2年費やし今年2月によくやく完成した。文部科学省選定映画になり、県内学校などで上映会予定が相次ぐ。中国や米国での公開も視野に国際映画祭に出品中。反応は上々らしく「鹿児島から世界と戦えることを示していきたい」と意気込む。

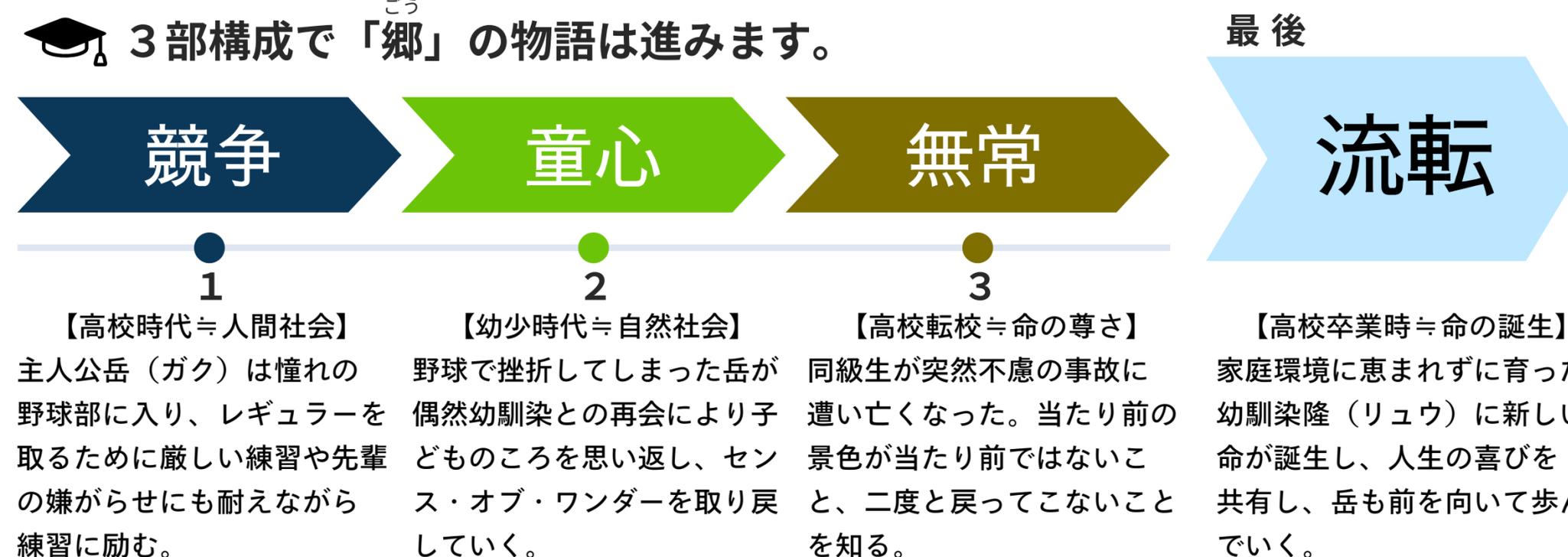
熊本市生まれ、関西育ち。「ほどよく自然があつて住み心地がいい」始良市の海の近くに昨年移住した36歳。(豊島浩一)

# 映画『郷』の紹介



2024年 文部科学省選定映画（科目：生き方・人生設計）  
 2024年 上海国際映画祭 監督賞・作品賞ダブルノミネート！  
 2024年 中国重慶35mm批評家週間映画祭 最優秀賞受賞作品！

🎓 3部構成で「郷」の物語は進みます。



そして、世界最大機材メーカーARRI社がアジアで唯一認定した企画！

ARRI初インディペンデント支援プログラムにおいてアジアで唯一採択され、スポンサーシップを締結。全機材無償で提供され撮影を再スタートし、計1年の撮影と3年の編集期間を経て2024年4月に完成した。





回放二：勃拉姆斯c小调交响曲

在正式对话前，主持人还请大家听几十秒音乐，来自勃拉姆斯著名的第一交响曲开始部分。音乐以定音鼓<sup>〇</sup>的敲击开场，紧张肃穆的气氛，就像教堂大门庄严地打开，朝圣队伍隆重的进入，震撼人心。这和《乡野》开始部分的日本太鼓<sup>〇</sup>声音在艺术高度上的情感交互。



映画「百円の恋」脚本家・足立紳氏。



岩井俊二監督。

ARRI arri\_asia 8時間

Congratulations to Japanese Feature Film "Vicissitudes" for being selected as the ARRIse Program's grantee. JAPAN

Click the link in our bio to join the next round



"The current circumstance we are in is incredible and we are grateful to ARRI. Our work is revolutionary, the images we are capturing are beautiful, and we can't wait to show them."

Producer Natsuka Ogawa JAPAN

Click the link in our bio to join ARRIse



レッドカーペット・中国ニュース掲載

南点

映画監督 伊地知 拓郎

子どもの頃の父の土産はいつも世界の中の映画や音楽だった。曲名や題名、作者も何も知らずに画面や音を通して国や文化、時間を超えて心が旅をする。物心着く頃には海外への好奇心や憧れであふれていた。高校卒業後は中国へ留学。そこから私の旅が始まった。内モンゴル、イタリヤ、ドイツ、オランダ、ギリシア、シンガポールやオーストラリアなど、五感全てで感じる外の世界はそれまでの私の想像をはるかに超えていた。

現地の人と生活を共にし、心を通わせ、異文化に浸る。留学先にはさまざまな国の人がい

虚構と現実

違う人たちが同じ屋根の下で暮らす。自分とは全く異なる人間にいつの間にか慣れていった。文字通り、見える世界が広がって意識することはただのフィクションに過ぎない。世の中に存在するとされている人間の集団の中の境界線は、私たちが頭の中しか存在しないものであり、人類全員それぞれに共通点があり、相違点があり、一人一人がそもそも異なった生き物だ。差別や争いが絶えない世の中で、それらをなくしていくためには私たち一人一人がそのフィクションに気づくための曇りなき眼を持って世界を見ること、文字や数字、画面や音を通して世界を見る疑似体験だけではなく自らの体を通して体験すること、それでしか達成し得ないのではないだろうか。



ふるさと

青春

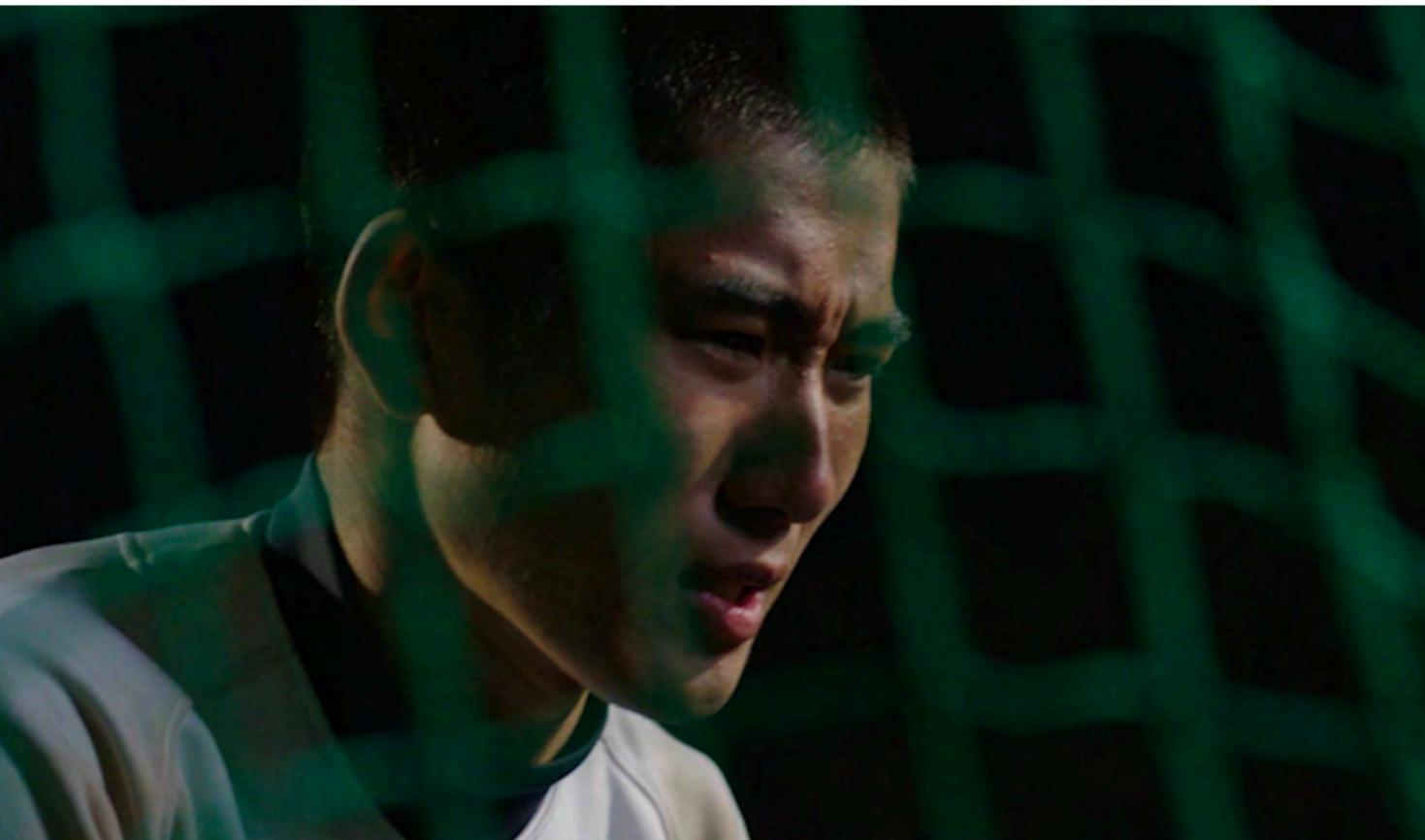
人生の選択

まるでどこまでも続く道が未来へとつながっているかのようなロケーションが、主人公たちの心情とも重なり、観る人の記憶に強く残るシーンとなっている。

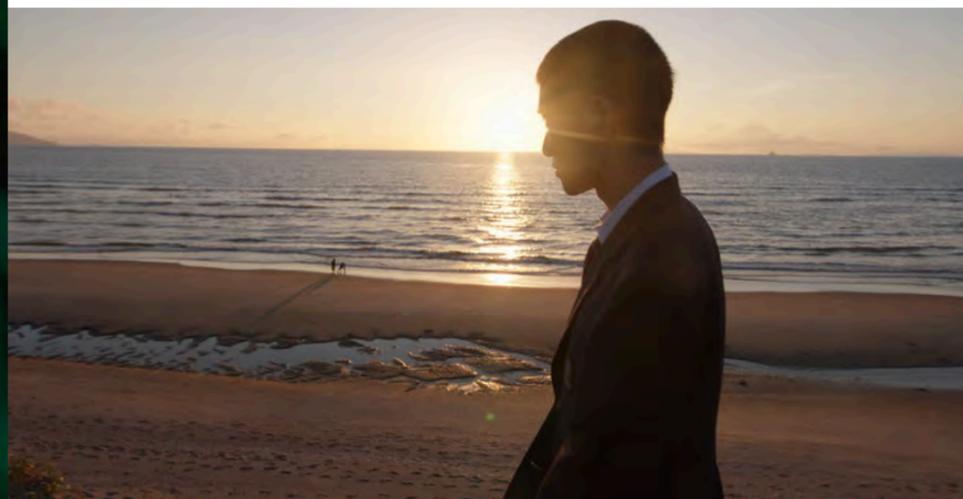
## 不完全なものの中にも美しさがある

質素・静寂・侘しさの中にある深い味わいは内面的な美しさを表し、経年変化による美しさは朽ちていくものの風情を感じさせる。私たちは“マジックアワー”という日の出や日没の限られた時間でどれだけの美しい一瞬を映し出すか＝「生きているこの一瞬一瞬が宝物である」というテーマに説得力を持たせるため、撮影やロケーションにもこだわりました。





教えようとしても教えることが難しい人生の困難や命の大切さを、主人公が経験する様々な困難を通し、「いつか自分も同じような苦しみを経験するかもしれない」と、自分に無関係ではなく、自分事のように捉え、たとえ夢がうまくいかなくても、別の道があることや、苦しいときこそ「次の一歩」を踏み出せることに気付くきっかけを与える。



実際に経験し  
痛みを知ることで  
本当の優しさを学んでいく

誰もがいつか直面する  
人生の試練を  
疑似体験する



# 映画『郷』学習プログラムの目標：3つの“ごう”を育む

郷

家族・地域・文化

ふるさと・つながりを感じる

業

学業・社会・未来

生き方を考える

GO!

挑戦・発信・実践

行動力を育む

## 目標

思いやりの心を“愛=いつくしみ”と表現し、自分の《ごう》を見つけ、【智・人・命】3つの愛を育てていく。

智

単なる知識や情報の蓄積ではなく物事の本質を見極め、思いやりのある知性を育む

いつくしみ

愛

人

人間理解を深め、人の痛みに気づき行動に移せる教養を身につける

命

他者や自然と共存し身近にある幸せや喜びに気づき命を大切にする心を育む

## 愛する心が、未来をつくる



# これまでの導入事例

## 2024年2月 文部科学省選定映画に認定、鹿児島県教育委員会 後援 県内中学校・高校での探究学習・道徳人権教材として上映

🏫 2024年実施校：開陽高校3回、志学館、鶴翔高校、種子島高校、長田中、加治木中、  
鹿児島県、薩摩川内市、始良市など

2025年予定：情報高校、鹿児島南高校、加治木中、綾南中、蒲生中、れいめい中など

🎤 講演のみ：星ヶ峯中学校、松陽高校、修学館、専修学校協会教職員研修・人権啓発、  
鹿児島女子高校、鹿児島市教育委員会・人権啓発講演会など

### 📍 先生方の評価

「主人公の人生と比較し、内面と向き合い、意見を言葉にするようになった」

「学校教育だけではカバーできない『生きる力』を考えさせる貴重な機会となった」

「探究学習の教材として活用しやすく、道徳・キャリア教育の両面から指導できる」

「映画鑑賞によって生徒が自己分析に積極的に取り組むようになった」

「地元を誇りを持ってない子どもたちの周りの環境に対する意識が変わった」

「映画鑑賞後の監督の話から、学びを深める効果があった」





# 感想文 紹介

「郷 ～僕らの道しるべ～」を鑑賞して

中学3年生

3年(4)組(39)番 氏名( )

伊地知監督の映画を鑑賞して、人に流されずに、自分がしたいと思うことを続けることはすごいか、いいなと思います。映画の中で出てきた野球部の男の子は、自分の夢をけがにされても、いじめられても練習を続けていて本当にすごいなと思いました。私も、これから高校を決めるときや人生で選択を迷ったときはこの映画のことを思い出して、一歩ずつ自分のペースで進んでいけたらいいなと思いました。

高校1年生

1年(2)組(10)番 氏名( )

☆感想

とてもリアルな映画だと思いました。成功だけでなく失敗もあり、人と関わることの難しさや、夢について考えることができました。どの人の目線からこの映画をみることがでも、感じ方が変わるなと思いました。この映画から私は人の夢をばかにせず、周りと協力し、互いにとって良い関係で生活すること、うまくいかなかったときは少しだけ逃げてもいいというところを感じ取ることができました。あまりすっきりしない最後でしたが、これがいいととても思いました。

「郷 ～僕らの道しるべ～」を鑑賞して

3年(3)組(20)番 氏名( )

この映画を通して1分1秒を大切に生き、いろいろなことに挑戦して失敗もして強くなっていこうと思いました。自分が進みたい道に行くほど険しい道になっていく。でもそれを乗り越えるところが夢に近づく一歩になると思いました。映画の中でも失敗しているところがあったけど回りにいる友達や先生などに頼ることも一つの道だと考えました。なかなかこうやって映画を観ることもないのでよかったです。ありがとうございました。

1年(2)組(5)番 氏名( )

☆感想

私は、この映画は見ている人に様々なことを考えさせることができると思います。人の声などが少ないことにより、普段耳にしにくい自然の音が聞こえてきたり、何を伝えたいのかわからないから、見ている人が沢山のことを想像し、面白い作品になっているなと思います。私はこの作品を見て、命の大切さや、友情などについて改めて深く考えることができました。私も、この映画を色々な人に見てほしいです。とて、普段気付くことのできないことだったり、今までで知っていたことをさらに深く考え、新しい発見などが見つけられるといいと思います。

## ◆ 2024年12月24日掲載 南日本新聞：観客のコメント

## ◆ 南日本新聞 記者：豊島浩一氏コメント

南日本新聞

て

パート

知念小百合(50)

始良市の伊地知拓郎監督が制作した長編映画「郷(ごう)」を、霧島市であった上映会で観賞した。高校野球で挫折した球児が再起していく姿が描かれている。心が洗われるようだった。生きていく上で、しがらみや心の支えになるものがある。競争や童心、無常、流転。そんなテーマに沿って映画は展開されていた。

せりふが少ない分、主人公の複雑な心情が映像や音楽とよくリンクしていた。スクリーンに映る地元の景色や季節の移ろいに、いつもそば

にある自然の包容力を感じた。

万物流転の中でもその一瞬一瞬を大事にして感受性を失わず、生きる力にしたい。失敗や挫折を経験や方向転換と捉えたい。

自分なりに納得できる人生の解を見いだせたらいい。映画を見て生き方を教わった気がした。一緒に見た娘もそうであってほしいと思う。

予測困難な時代に感じる生きづらさは、あらゆる世代に共通する思いかもしれない。「自然と共に生きていく」。伊地知監督の舞台あいさつを忘れないように日々を過ごしたい。

(始良市)

映画「郷」に生き方を教わった

始良支局・豊島浩一

記者の目

94分間、くぎ付けになった。鹿児島市出身で始良市に住む映画監督、伊地知拓郎さん(26)の初の長編作品「郷」僕らの道しるべ」を加治木中学校での上映会を見た。

高校の野球部でのいじめ、軍隊のようなランニング、しごき、声出し、暴発する感情…。40年近く前に味わったグラウンドでの孤独感をひりひりと思い出した。

高校球児が主人公だが、一転して自然に抱かれる少年時代が展開する。桜島、開聞岳、吹上浜、始良の田園風景、出水のツル。県内のあらゆる場所が新しい輝きを放つ。せりふが少なく、難解と思う人もいるだろうが、野球部の練習風景も

羽ばたけ「郷」

含めて、一枚一枚の絵が美しく飽きさせない。世界最高峰の機材メーカー「アリ」がスポンサーになり提供を受けたのも大きいだろうが、映像素材の本質をつかみ取る伊地知監督の才能を十二分に感じさせる。

本人と話して驚いた。父親は本紙でエッセー「日中おうらい」を7年間連載し、詩で2003年度南日本文学賞を受賞した陳躍さん。映像に挿入される言葉が実に詩的なのは影響だろうか。

世界の映画祭を席卷する濱口竜介監督のように大きく羽ばたいてほしい。映画専門大学「北京電影学院」を首席で卒業し、中国語と英語も堪能な俊英の活躍が楽しみだ。

2024・5・17(金)

コロナという未曾有の時代を経験した子どもたちにとって、「心のケア」は、今とても大切な課題です。コミュニケーションの機会を失い、人との距離を感じながら育ってきた子どもたち。悩みを抱えながらも、それを誰にも打ち明けられずにいる子どもたち。そして、もしかしたら先生方も同じように、不安や孤独を感じているかもしれません。「大丈夫だよ」と、そっと寄り添える何かが必要です。この映画が、そのきっかけになればと願っています。

『郷』は、人生の困難や葛藤、夢への挫折をリアルに描きながら、「言葉で教えられないこと」を「感じる」体験として提供する作品です。そのため、生徒・教員・社会人に対し、それぞれ異なる影響を与えることができるという点で、一般的な映画とは異なる「教育的な意義」を持っています。教育とは、ただ学びを与えることではなく、心を支えることでもある。そして、その支えになるのは先生だけではなく、時には映画のような「感じる体験」かもしれません。この映画が、子どもたちや先生方にとって、少しでも心の拠り所となり、温かい何かを残せるものになれば嬉しいです。

「今を生きること」を感じられる時間が、ここから生まれることを願って。

**「人生の流れに寄り添い、静かに問いかける映画」それが『郷』です。**

プロデューサー 小川夏果